

## 特集 「先住民族サミット in あいち 2010」

2010年10月18日（月）～29日（金）に、生物多様性条約第10回締約国会議（COP10）が名古屋市で開催されました。それに先立つ10月15日（金）～18日（月）に、愛知県立大学が、朝日新聞名古屋本社、世界先住民族ネットワーク AINU（WIN-AINU）と共同で、「先住民族サミット in あいち 2010」を開催しました。本号はその特集号です。

COP10 を機に開催したこの企画は、多文化共生研究所が（愛知県公立大学法人）理事長特別研究費に応募して採択された「環境共生・多文化共生に係る国際フォーラム等の開催」の主要イベントとして実施したものです。企画の全体は『せかい SATO フェスタ』とし、杉山三郎特任教授を中心に実施された世界古代文明フォーラム「古代文明から知る：生物と文化の多様性の恵み」（10月7日～9日）との2本立ての構成でした（古代文明フォーラムの報告は別途刊行される予定）。

「先住民族サミット in あいち 2010」は、2008年の洞爺湖サミットを機に、アイヌモシリ（北海道）の沙流郡平取町と札幌で開催された「先住民族サミット」アイヌモシリ 2008 を継承するものです。その「先住民族サミット」では、世界各地の先住民族がアイヌモシリに集結し、先住民族の権利回復、環境、教育などについて話し合われ、G8へ重要な提言がなされました。大成功を収めたこの最初の「先住民族サミット」の実行委員会を基にして設立されたのが、萱野志朗氏を代表とする WIN-AINU（世界先住民族ネットワーク AINU）です。

「先住民族サミット in あいち」では、「生物多様性」と「文化多様性」の関係—とりわけ、「生物多様性」と「環境の保全と持続的利用」における先住民族文化の重要性—に焦点をあてました。世界各地の先住民族は、多様な生態系の中で「環境との共生の知恵」を培い、実践し、今日まで伝えてきました。その先住民族の多くは、歴史的に迫害され、生活の場を奪われ、固有の文化が失われてきました。UNESCO は「生物多様性」と「文化多様性」の喪失の危機を訴えてきました。それは両者が危機にあるというだけでなく、相互依存関係にあることを意味しています。多様な先住民族の存立・繁栄と「文化多様性」の維持は、とりもなおさず、「生物多様性」と地球の未来にとって根本的な重要性を持っています。「地球市民」がそうした認識を共有し、先住民族が伝えてきた価値観や知恵を学ぶことが、地球の未来にとって不可欠なことです。

「先住民族サミット in あいち」では、先住民族と研究者や NPO とが連携して、その問題を議論し、市民を交えて交流し、発信することを目指しました。その点は 2008 年の「先住民族サミット」アイヌモシリと少し異なります。先住民族としての立場からの権利の主張はたいへん重要です。一方で、「生物多様性」や「環境保全」などにおいては、世界の先住民族と研究者や NPO や生活者は、価値観を共有する地球市民としての同志です。そうした連携の中に、未来への大きな可能性を求めることができるでしょう。

（編者 稲村哲也）

## ごあいさつ：主催者を代表して

愛知県立大学長 佐々木 雄太

2010年10月、愛知県と名古屋市を会場に、生物多様性条約第10回締約国会議（COP10）が開催されました。この会議には、海外から7,000人を超える人々が参加し、本会議では政治的、経済的な問題をめぐる政府間協議や交渉を含めて、生物多様性をめぐる広範な問題が論議されました。生物資源の利用に関する先進国と発展途上国との深刻な対立ゆえに会議の行方が心配されましたが、少なくとも生物多様性の維持が私たちと私たちの次の世代の安全な環境と健全な暮らしの保証である点についてコンセンサスが形成されたことを喜びたいと考えます。

また、この国際会議の開催を通じて、生物多様性に関する問題意識が市民の間に広まり、人間と人間社会を取り巻く多様な生物との共生が、遠い将来にわたって地球社会の基本的な課題であることを市民が自覚し、自然と人間との共生を探究する出発点になったことを喜びたいと考えます。

愛知県立大学は、大学の理念の一つに、「自然と人間の共生、科学技術と人間の共生、人間社会における様々な人々や文化の共生を含む“成熟した共生社会”の実現を見据え、これに資する研究と教育、地域連携を進める」ことを謳っています。本学は、この理念の具体化の一端として、昨年のCOP10開催に当たって、朝日新聞社の全面的なバックアップと、多くの学術機関や団体のご協力を得て、「せかい SATO フェスタ」と銘打った二つの大きな国際的フォーラムを主催しました。ひとつは世界古代文明フォーラム「古代文明から知る：生物と文化の多様性の恵み」、いまひとつが「先住民サミット in あいち 2010」です。

「先住民サミット in あいち 2010」は、2008年の洞爺湖サミットを機に北海道で開催された「先住民サミット」アイヌモシリを継承するもので、WIN-AINU（世界先住民ネットワーク AINU）の全面的なご協力によって実現しました。今回の「サミット」では、人と自然との豊かな関係、あるいは「人間の文化の多様性」と「生物多様性」との調和を実現してきた先住民の皆さんのご経験と叡智をお伝えいただき、また、さまざまな学問領域で「生物と文化の多様性」を研究している多くの科学者からの提言をいただきました。それらは、私たちに、生物多様性と健全な人間社会のありかたはどのようなようにつながっているのかという問題をはじめ、生物多様性に関する、あるいは人間社会の在り方そのものに関する基本的な問題を考えるための、重要な手掛かりを提供してくれました。私たちは、諸々の提言をしっかり受け止め、21世紀の人类的課題である「共生社会」の実現に向き合いたいと考えます。

この報告書の刊行にあたって、あらためて朝日新聞社、WIN-AINUをはじめこの企画にご賛同、ご協力いただいた皆さま、この催しのために世界各国から、日本全国から、ご参加いただいた皆さまに、心から御礼を申し上げます。

## 地球と生きる、その一步のきっかけに

朝日新聞名古屋本社代表 高橋順二

自然と寄り添って生きる隣人の知恵に耳を傾け、未来の人類と自然の関係を考えていただこう、しかも、難しい理論でなくて体で感じられるようなかたちで……。こんな意図で企画した「せかいSATO（里）フェスタ」を、生物多様性条約第10回締約国会議（COP10）に合わせて開催することができました。ご参加いただいた皆様にひとつの視点を提供できたことを、名古屋で新聞を発行している報道機関として何らかの役割を果たせたのではないかと振り返っています。

海外を含め19の先住民族から40人が集い、それぞれの自然とのつきあい方や哲学を紹介していただきました。お話の内容から、日本の現代人が忘れかけている、何か、ふるさとを思い出すようなあつたかさを感じ取られた方も少なくないのではないのでしょうか。

民族音楽のコンサートは、どの会場でも喝采に迎えられ、踊りの輪ができました。様々な音楽に見られた文化の多様さは、民族それぞれの個性なくしては存在しないもので、なるほど「多様性」にこそ豊かさは存在するものなのだなど、客席の一端に身を置いて感じた次第です。急速な国際化の中で生活様式の均一化が進み、民族の独自性との摩擦も起きている現代ですが、少数の側にある価値をきちんと認めることから、人類はお互いに豊かさを享受していけるのだと思います。

地球環境を守るという壮大な目標に向かって、私たち一人一人は何ができるのか……。気の遠くなるような課題ではありますが、COP10はそれを考える機会を私たちに与えてくれました。民族にしても生物にしても、まずは互いを認めることから一歩が踏み出せる。今回の企画が、小さくても波紋のはじまりとなることを祈ってやみません。

## 日本から世界へと広がった思い

朝日新聞名古屋本社統括センター長 中根勉

正直なところ、開幕ぎりぎりまで、先住民の方々に本当に集まってもらえるのか、観客の入りはどうか、心配でしかなかった。飛行機が遅れないか、宣伝は十分だっただろうか。催事の常とはいえ、いつも準備は押せ押せになる。そんな心配は、催事が始まって民族音楽のコンサートが始まったころにはどこかへ消えた。音色やリズムに乗せたそれぞれの民族の情熱が会場に広がって、観客の踊りの輪ができるころ、私自身、裏方であることを忘れ、小さいながら人類の平和の祭典に参加しているよう

な気持ちになった。

関係者が言うことではないかも知れないが、よくこれだけの規模の催事をやり遂げたなというのが率直な感想だ。愛知県立大学ほか、関係機関、団体のみなさまの熱意と実行力に心から感謝したい。何せ、この企画の発端は酒飲み話の勢い（ごめんなさい）で飛び出したものだからだ。それを本物にしてしまうパワーは大変なものだ。

2009年の春、朝日新聞社は愛知県立大学のキャンパスで、森林文化協会とともに「にほんの里フェスタ」を開催した。発刊130周年に合わせて「にほんの里100選」を選定したことを記念し、各地の里を紹介し、そこでの人と自然の営みを紹介する催しだ。里の恵みを使った郷土食「里めし」を味わってもらい、里に生きる女性たち「ばっちゃん」に生活の知恵を語ってもらう。学者らによるシンポジウムもからめて、翌年の生物多様性条約第10回締約国会議（COP10）を身近に感じてもらう狙いだった。

この催事の打ち上げを兼ねた反省会に、私も同席していた。酔いが進むにつれて「今度は国際版の里フェスタをやろう」という提案にあいなった。「世界中から先住民族に集まってもらおう」「コンサートも開こう」。話はスパイラルを描くように盛り上がっていった。

もちろん、このような計画を実現させるにはそれ相応の資金が必要だし、海外からゲストを招くための国際的なネットワークも必要だ。朝日新聞名古屋本社だけで簡単に実現できることではない。「やれたらいいな」とは思いつつ、実行となると足踏み状態だった。それを「やるぞ」に変えてくれたのは、奔走していただいた稲村哲也教授をはじめとする愛知県立大学の皆様、そしてWIN-AINU（世界先住民族ネットワークAINU）、総合地球環境学研究所など共催をいただいた皆様の熱意だった。ここでは、朝日新聞が愛知県立大学の背中を追っかける状況になっていたと申し上げてよい。たまたま2008年の洞爺湖サミットの時に日本で初の先住民族サミットが開催されており、当時の人脈を頼ることができたという幸運もあったが、短期間で海外招待者のリストアップや民族音楽のコンサートの出演者交渉を進めていただいた。

10月16日の先住民族サミットのオープニングは朝日新聞名古屋本社が入る名古屋市中区の「アムナットビル」15階の朝日ホールで開かれた。圧巻だったのは、やはり民族音楽のコンサートだった。先住民族のゲストのみなさんの話はそれぞれとても示唆に富み、それだけでも意味のある催事だったが、音楽の持つ力といおうか、コンサートは、先住民の知恵や思いを肌を通して私たちに伝えてくれた。世界各地の独特な楽器や歌唱を一堂に見られるという贅沢な内容だった。

この日、コンサートの最後を締めくくったのはアイヌアートプロジェクトによる演奏だった。グループの持ち味は、伝統的なアイヌ音楽に現代ロックを大胆に取り入れたところ。その音は、会場のホールの壁をジンジン響かせただけでは収まらず、階下の14階にもがらがん響いた。数日前から、音の影響についてはビルのテナント各社に事前通告してあったものの、もしもこの演奏が終業時間の5時より前だったら何らかの反応があったかも知れないと思う迫力だった。パワーにあふれた演奏は、先住民族の力そのものだった。「もう少し音量下げてください」なんて言わずにコンサートを終えられたことを、今でもとても幸せに感じている。

# 先住民族サミットの意義

朝日新聞名古屋本社報道センター員兼論説委員 伊藤智章

国連生物多様性条約第10回締約国会議（COP10）の名古屋市開催が決まったのは、開催2年前の2008年のこと。それまで生物多様性条約について詳しい記者もほとんどおらず、最初はラムサール条約などと同様、生きもののための自然環境保全の、包括的な条約、という程度の理解から報道も始まった。

開催間近になり、我々の試行錯誤もようやく核心らしきものに近づくとつれ、今度は当惑を感じることも多くなった。多様な生物環境の保全策を講じる、といえはだれも反対しない。でも現実問題としては、ブラジルのアマゾン熱帯林をはじめ、生物資源の多くは南の途上国にある。それを守るには、北の先進国の資金が必要だ、いや、これまで南を収奪してきた北の責任だ、十分な保全策を講じない南の国の責任も大きいではないか、などなど。果てしのない南北問題の議論になってしまう。

COP10のさなか、南の代表者からは「大航海時代以来の植民地支配の問題だ」という主張まで飛び出した。正論だろうが、だからといってそれで目先の交渉がすすむわけではない。また、北に住む我々だって、失われていく里山自然をはじめ、生物多様性の危機を感じているのに、南北のカネの議論ばかりでは、心に響かない。

地球温暖化対策の議論と同様、今日の環境問題は、現実的には対策のコストをどう負担するか、どこから資金を調達するか、という問題に行き着いてしまう。COP10の議論もその典型だった。

そのとき、開かれた先住民族サミットは、全く別の回路から、この問題に光をあてた。カネをよこせ、と叫ぶ南の国の政府自らが、その国では開発指向で、先住民族を圧迫し、その資源と知恵を奪う側にあるのではないか、という疑義。

あるいは、そもそも、先住民族が長く生物多様性を活用しながら共存してきた、という事実の重さ。なるべく広い面積に単一作物を栽培しようとする低コスト大量生産方式の現代物質文明と、まるで違う価値観を有しているのではないか。

彼らから得るべきは、資源にとどまらない。自然と人間の関係性をどうとらえるか、という問題に直結しているのではないか。

先住民族サミットでの参加者の発言を聴けば、文化的、物質的圧迫のもと、大変な境遇にある。しかし、彼らを支援する対象としてだけでなく、学ぶべき文化の伝承者として尊びたいという気持ちにもなった。

残念ながら、資金メカニズムをめぐるCOP10終盤の騒がしさのなかで、先住民族サミットがどれほどの影響力をもったか。それは分からない。

でもその問題提起は、多くの人たちの胸の底に届いただろう。

生物多様性を減ぼしてきたのは何だったのか。我々の来し方も振り返る、貴重な機会だった。

（05年から現職。COP10を現地で取材した）

# 「先住民族サミット in あいち 2010」を開催して

WIN-AINU（世界先住民族ネットワーク AINU）代表 萱野志朗

## ■開催のきっかけ

私は2010年1月30日から2月1日の日程で、愛知県犬山市の野外民族博物館リトルワールドに建てられているポロチセ（大きな家）の改築工事に伴う資材の搬入作業に立ち会っていた。この改修工事は、私の父・萱野茂が建てたものを私が引き継ぎ、親子二代で関わることとなった。1月31日の夕方、同博物館の学芸員室で愛知県立大学外国語学部教授の稲村哲也先生と京都大学名誉教授の山田勇先生と会う機会があった。稲村先生は愛知県立大学に就職する前は同博物館の学芸員を務めており、今から約30年前のチセ新築の際、私の父・萱野茂に依頼して建てたという経緯があった。また、その縁で、私は2009年1月31日に、中部人類学談話会（会長：稲村哲也さん）が主催する研究会において、『先住民族サミット アイヌモシリ2008』について、同サミット実行委員会統括代表という立場で報告をした。

話を2010年1月30日に戻すと、その日の夜、私、稲村先生と山田先生の3人で名鉄神宮前駅の2階の居酒屋で酒を酌み交わした。稲村先生は『先住民族サミット アイヌモシリ2008』が7月1～4日に北海道で開催されたとき参加した。会議自体もよかったが、特に音楽祭で参加者と出演者が一体となって盛り上がり、感動した」と話された。続けて「あのような感動をもう一度体感出来る会議が、名古屋でも出来ないだろうか」と、おっしゃった。「2008年の先住民族サミットの際に、次回はカナダで2010年に開催されるG8サミットに合わせて、カナダで開催しようと思ったが、現時点においてカナダでは先住民族サミット開催のための実行委員会もまだ結成されていない、状況である」と私は稲村先生に伝えた。そこで提案されたのが「今年の10月には、名古屋市でCOP10（生物多様性条約第10回締約国会議）が開催されるので、その直前に第2回先住民族サミットを開いてはどうか」というものであった。稲村先生は、「愛知県立大学が費用を工面して開催する場合、授業期間にあわせる必要があり、夏休みを避けて開催する必要がある。開催時期はこれから検討したい」と話された。一応、この時点で確認されたことは、カナダで第2回目の開催が難しいのであれば、名古屋で第2回を開催する方向で検討することと、もし第2回目の実行委員会を名古屋で結成する時には、私にも実行委員会のメンバーになって欲しい旨の要請を受けたことだった。

## ■「先住民族サミット in あいち 2010」開催

2010年4月23日と6月7日に実行委員会が愛知県立大学で行われ、10月15日（金）～18日（月）に先住民族を愛知県へ招聘し、サミットを実施することとなった。主催は愛知県立大学、朝日新聞社、そして私が代表を務めている世界先住民族ネットワーク AINU（略称：WIN-AINU）である。9月13～14日にも愛知県立大学と朝日新聞社（名古屋）で会議を持ち、WIN-AINUの他のメンバーと共に打合せを重ねた。

第1回目の『先住民族サミット アイヌモシリ2008』に参加したメンバーの一部に WIN-AINU から声をかけ、第2回にも参加していただくことになった。グアテマラのロサリーナ・トユックさん、アオテアロア（ニュージーランド）のステイブン・ケントさん、エディ・ウォーカーさん、台湾からはシン・オラムさんが参加してくれた。2回目の先住民族サミットということもあり、顔なじみの人たちと交流できたことは有意義であった。特にアオテアロアのステイブン・ケントさんエディ・ウォーカーさんからは、マオリの大学の設置状況や現状について情報をいただく機会があった。私も日本においてアイヌ語やアイヌ文化を学べる大学の設置が必要だ、と考えているので、とても参考になった。

WIN-AINUからは、私を始め事務局長・秋辺日出男、副代表の結城幸司、札幌事務局の島崎直美、東京事務局次長の島田あけみ、顧問の宇梶静江、さらに、樺太アイヌ協会会長の田澤守さん、北海道アイヌ協会紋別支部長の畠山敏さんなどが参加し、意見発表をしてくれた。音楽祭では、アイヌアートプロジェクト、大阪のミナミナの会、東京で活動しているアイヌの仲間たちのヤイレнкаが参加してくれた。

## ■感想と抱負

2008年に続いて、COP10という重要な機会に先住民族サミットを継続して行うことができたことは何よりも大きな意味があった。2008年と異なる点として、北海道の外、本州の中心で行うことができたこと、研究者との交流ができたこと、リトルワールドのアイヌ家屋を利用して世界の先住民族を迎えてカムイノミを行うことができたことなどは、大きな収穫だった。

反省点としては、2008年開催の第1回目でも挙げられていたが、今回の「先住民族サミット in あいち2010」においても、先住民族同士の交流の時間を単独で設けなかったため、交流の時間が不十分だったことである。

WIN-AINUは、今後とも世界の先住民族とネットワークを広げながら、われわれ先住民族のおかれている状況を世界に発信しながら「先住民族の権利獲得のための活動」を続けていきたいと考えている。巷の情報では、国際連合が音頭をとって「先住民族の国際会議」が開催される予定があるようであるが、まずはそれへの参加を検討したい。

## ■最後に

今回の「先住民族サミット in あいち2010」を企画して下さった愛知県立大学ならびに朝日新聞社、そして世界中から集まって下さった先住民族に感謝致します。そして、この国際会議を開催するにあたって、ご尽力いただいた事務局の皆さん、ボランティアスタッフのみなさん、通訳をして下さった京都産業大学の岡崎先生ほかの方々に深く感謝申し上げます。朝日新聞社の日丸美彦さん、愛知県立大学の佐々木雄太学長ならびに稲村哲也先生に深く感謝致します。ソノノ イヤイライケレ（本当にありがとうございます）。

## せかい SATO フェスタ「先住民族サミット in あいち 2010」に参加して

WIN- AINU（世界先住民族ネットワーク AINU）事務局長 秋辺日出男

2010年10月15日～18日、一大イベントに参加させていただきました。2010年はカナダで行われるG8に先住民族サミット第2回の開催を想定していたのですが、なかなか現地受け入れなどの繋がりがうまくいかずにいたところ、愛知県でおこなわれるCOP10のサイドイベントで先住民族サミットを開催する機会に恵まれました。開催を支えてくださった関係者の皆様と、特に愛知県立大学の稲村先生に感謝します。パセノボ・ヤイライケレ！

WIN・AINUのメンバーの多くは16日に発表しました。前日の15日は開幕を祝うレセプション、私は北海道から夕方5時過ぎに出て、最速でも間に合わず、遅れて会場入り。すでに始まっていた音楽祭を中途から観ました。入り口では自分の販売ブースやアイヌアートの皆さんのコーナーもあって、なかなかいい感じ！出演者はみんなレベルが高いステージング、アイヌも頑張らなくちゃ。勝手ながら、特に気に入ったのは童謡を歌っていた方（深川和美さん）とエゴ・レモスさん、今風だが、なんとなく先住民族の匂いが出てるところがいい！出ちゃうのかな？！漏れるんだな！

あははは！料理もおいしかったし量もちょうど良かった。私は仕事上、観光関係でよくホテルでの大きな立食パーティーなんかに参加するが、山盛りのごちそうが最後にはドッサリ残っている様子を見て、いつももったいないなあと思っていた。そのたんに、以前行ったブラジルやカナダの奥の村の事を思い出す、日本は罰あたりだなあ。だからこの日はさすが生物多様性を解ってるなあと感心し、ちょっと自慢でありました。足りなきや自分で、後でどっかさ食べに行けばいいのさ。

そもそも先住民族だからアイヌ民族を標榜している訳ではない、生まれたときから物心ついた時からアイヌなんだと思っていたし、気がつかないうちにそれっぽく育っていた。私の感覚では先住民族と云う感覚は後乗せである。政治的意味付けだから当然ではあるが、混同しないで語るべきである。つまり今回の「せかい里フェスティバル」での民族の知恵を生かす、あるいは自然観を生かすと云うのはアイヌの民族感からのものであるので民俗ともいえる。

しかし、民族文化、民俗文化を主体的に実践継承し発展させる現在のアイヌが民族として消滅してしまっただけは困るし寂しい。日本だって文化の多様性が必要。当然権利回復と云うテーマも同時並行で語られるべきだし、その具現化が第二回の「先住民族サミット」だ。

### ■世界先住民族交流祭 10月17日 野外民族博物館リトルワールド

リトルワールドは世界各国の伝統家屋や民族工芸品やイベントがある、とても素敵な施設でした。その中にアイヌの伝統家屋が再現されていて、そこでアイヌの儀式カムイノミが貝沢貢男エカシを司祭に執り行われた。やっぱり儀式は良いね！自分たちのルーツに対する畏敬を表現しアイデンティティーの確認と共に自分たちの血と肉体に宿る魂の再活性化活動を促すエネルギーの補給になる。

それは他の参加者、特に先住民族同士には何も云わなくても伝わる共通体験で、続くクリンギットの



家屋でボブ・サムの語りの儀式でも同じ感覚に浸った時間だった。カムイと一緒に居た。

#### ■先住民族の出会い 10月18日 愛知県立大学講堂

各国からたくさんの仲間が集い、それぞれが自分たちの悩みや問題、展望を述べたが、おおむね「先住民族宣言」に則って国内法の整備を求めて行くという趣旨が多かったように思うが、それにしても各民族色々な 이슈を抱えていた。だが一番うれしかったのは各国の先住民族が、揃ってアイヌ民族を支持すると云うコメントを次々発表してくれた事だった。

実は国主催で開催している COP10 ではアイヌ民族の仲間二名（阿部ユボ、島崎直美）が参加してはいるものの、テーマや開催趣旨にアイヌは登場していない（要確認）。なんと云うことだ！無視されているようなものだ。愛知県立大学に拾われて良かったね（詳しくは両氏の報告を待つ）。だから余計「支持する！」発言は嬉しかったと同時に、アイヌはまだまだメジャーじゃないねと痛感しました。だって生物多様性じゃないとアイヌも登場する場面が無いもんね！改めて反省と共にガンバロウ！と思いました。「多文化多民族社会は豊かな社会（国家）づくりに貢献する。」

#### ■10月19日 COP10 名古屋国際会議場でカムイノミ！

まずセキュリティーのチェックの厳しいのに驚いた！空港以上だと思ったよ。色々手続きして入ったら上等なリュックをいただいた。中には関係資料や COP10 の情報が満載した USB メモリーがあるしノート、ボールペンなどデザインのよろしい小物もいっぱい。会場の一室でコウジ君とカムイノミしてきました。

#### ■反省点としてチョトだけ

1. 先住民族同士の交流が十分ではなかった。
2. WIN・AINU の役員がばらばらのホテルだったので毎日行うべき反省打ち合わせが出来なかった。
3. 事前の打ち合わせで全体のイメージをつかめきれなかった。

#### ■全体として

オープニングイベントからたくさんの先住民に会えたり、愛知県や全国からの参加者とも交流を持てた。又たくさんの研究者の発表も大変興味を引くものだった。生物多様性は、そのまま多くの切り口がある研究の多様性だった。多種多様のテーマに沿ったそれぞれの発表をトータルで繋ぐものが先住民族の役割で、イメージキャラクターになっていたように思うし、それは成功だった。

又いつか世界を繋ぐ為、先住民族と平和を愛する人々がどこかで集って、色々な話し合いや芸能交流をしたいですね！愛を知る土地で又会いましょう！ 稲村先生にチュッ♡！

みんなありがとう！関係のスタッフと主催者、後援の方々にパセノポヤイライケレ！  
スイウヌカラアンロー！！

# 「先住民族サミット in あいち 2010」を企画・実践して

愛知県立大学多文化共生研究所所長 稲村哲也

## ■研究者の立場から

「先住民族サミット in あいち 2010」開催の経緯についてお話ししておきたい。まず、私自身の研究とのかかわりだが、専門が文化人類学で、これまでアンデスやヒマラヤ、モンゴルで調査し、いわば自然と調和して生きている人々の中でいろいろな事を考えさせられ、生物多様性と文化の多様性というものが非常に密接に関係しているのを実感してきた。

COP10 で論じられる「生物多様性」は、あらゆる生物種・生き物の種類の多様性というのはもちろん、特定の自然環境の中で生物が互いに関係し合って形成されている「生態系」の豊かさ、さらに、ひとつの種の中の遺伝子の多様性（個体の個性）、以上の3点における多様性が問題とされている。私が研究対象としてきたアンデスの人々が伝えてきた文化や生活実践は、まさしく、その3点と関わっている。

実は生物多様性条約には8条j項で「先住民族の文化」の重要性が言及されている。「伝統的な生活様式を有する原住民の社会やそこでの知識や工夫や慣行を尊重すること、そしてそれを保存したり維持すること、また決定への参加の重要性、また生物資源の利益の配分などについて書かれている。つまり、生物多様性条約における「文化」の重要性がすでに述べられるわけである。

しかしながら、条約では、個別の地域における生物多様性保全や環境の持続的利用における先住民族の文化を、生物多様性の保全等を維持するための重要な要素の一つとして位置づけているに過ぎない。つまり、私が常々実感してきたことは、地球の未来にとってより根源的な「先住民族文化」の位置づけであり、地球全体の人々が先住民族の文化や価値観を知って評価し、そこから学び直すことで未来の地球全体の方向性を考えていくべきだ、というよりグローバルな視点からの「先住民族文化」であった。私が「サミット」でテーマとすべきだと考えたのは、先住民族をはじめとする自然と調和して生活する人々の生き方や価値観を学び、発信し、共有できるものは共有し、我々の生き方を考え直す、社会の方向性を変えていく、という事である。ただし、「共生の文化」は「先住民族」に限定されるわけではない。

以上のような観点から、企画のコンセプトを次のように設定した。

- ・「生物多様性と文化多様性」の重要性、その持続に向けた議論と提言
- ・古代文明、先住民族、SATO(里)文化に見られる共生の価値観を再評価
- ・アイヌ民族を中心に、世界の先住民族・SATOBITO(里人)の国際的連携
- ・COP10に連携し、愛・地球博(環境共生と多文化共生)の理念を継承

## ■アイヌの方々との関わり

私は、愛知県立大学に赴任する前、1981年から研究員として野外民族博物館リトルワールドで仕事をした。その最初の仕事のひとつが、アイヌ研究者の大塚和義氏の仲介で、平取町二風谷のアイヌ資料館に萱野茂先生をお訪ねし、野外展示場にアイヌのチセ(家屋)を建てていただくようお願いすることであった。萱野先生は、「若い人にアイヌの伝統技術を伝えるいい機会です」と快くお引き受けくださり、私はとくにお願いし

て、資料館の野外展示場のアイヌのチセに一晩泊めていただいた。

その後は、アイヌ文化の研究をしたわけではなく、アンデス、ヒマラヤ、モンゴルなどの先住民族、牧畜文化などの研究に携わってきた。ただ、アイヌ文化研究者の小谷凱宣氏が国立民族学博物館から名古屋大学に移ってこられ、中部人類学談話会でずっとご一緒させていただき、アイヌ文化研究の最先端に身近に触れることはできた。

2008年7月、「先住民族サミット」が開催されることを知り、27年ぶりに二風谷を再訪し、サミットに参加した。その機会に、萱野茂氏の後を継いでアイヌ資料館の館長をしている萱野志朗さんと初めてお会いした。アイヌの方々が一貫して実施された「先住民族サミット」アイヌモシリは大盛況で、世界の先住民族同士の熱い議論と、強い共感と絆が傍からも感じられ、感動した。もっとも、一般参加者の和人である私は、その連帯の熱気と感動のおこぼれを頂戴するに過ぎないという立場であった。結城幸司さんが代表を務めるアイヌアートプロジェクトの演奏をはじめ、アイヌの若い世代の新しい芸術活動にも強い印象を受けた。

人の縁とは不思議なもので、リトルワールドのアイヌのチセが老朽化したため、3棟のうちの母屋を建て替えることになり、その工事を萱野志朗さんに依頼した。それに合わせて、萱野志朗さんには、中部人類学談話会で「先住民族サミット」について報告していただいた。中部人類学談話会には、結城幸司さんと福本昌二さんに来ていただき、トンコリ演奏とユーカラをやっていただいた。結城幸司さんとの仲介の労を取っていただいたのは、アイヌ支援を目的とするグループ「シサムをめざして」の本多さんである。本多さんとは、「先住民族サミット」の際に、移動手段がなく困っていた私を車に乗せてくれたのがきっかけで、名古屋ご出身とのことで、親しくなった。本多さんにも中部人類学談話会で発表していただいた。さらに、結城さんには、野外民族博物館リトルワールドで版画展を開いていただいたり、朝日カルチャーセンターでトークと公演をしていただいたりもした。そうした機会を経て、アイヌの方々と親しくしていただき、お互いの考え方を理解しあうことができた。

「先住民族サミット in あいち」開催のもう一つの契機となったのは、2009年4月に朝日新聞社が本学で開催した「にほんの里フェスタ」である。シンポジウムでは、研究者の発表やNPOの発表とともに、「日本の里」100選のなかから選ばれた「ばっちゃん」が集まって里の暮らしや現状を紹介した。キャンパスで「さとめし」や「伝統遊び」も出した。「にほんの里フェスタ」は当初予定していた名古屋大学での開催がキャンセルとなったため、急きょ本学が協力し、私がコーディネーターを務めた。このイベントも大成功で、とにかく生活実践者のばっちゃんたちの迫力に圧倒された。このイベントを担当したのが、朝日新聞社広告委員の日丸美彦さん、それと愛知県立大学出身で朝日新聞社統括センター長の中根勉さんであった。そのお二人との内輪の打ち上げの席で、「次はせかい里フェスタをやろう」という話が持ち上がった。そのときの私の頭の片隅にあったのが「先住民族サミット」アイヌモシリであった。日丸さんはその後、「せかいの里」文化にのめりこんで、王曉葵先生と私とで中国四川省震災復興支援の延長として実施したチャン民族やチベット民族の現地調査に同行し、2009年秋に愛知県立大学大学院国際文化研究科（夜間主コース）を受験して合格し、2010年春から社会人大学院生となり、「先住民族サミット」では、朝日新聞社広告委員との二足の草鞋で、大活躍していただいた。

## ■実施体制

萱野志朗氏や結城幸司氏との共同の活動や親睦の過程で、前文で萱野さんが言うておられるような経緯により、WIN-AINUと共同で「先住民族サミット」を開催する方向性が決まった。私が札幌に赴き、また WIN-AINU

のメンバーに来ていただき、WIN-AINU 役員の秋辺日出男氏、島崎直美さん、アドバイザーの小野有五先生（北大教授）らともお会いし、協議を重ねた。

朝日新聞社のほうでも、編集を含めた実行体制が固められた。高橋順二代表をはじめ、高橋昌彦広告部長、江崎貴裕キャップとお会いし、連携体制が整った。朝日新聞社として独自予算を拠出していただくと共に、企業の協賛金も募っていただくことになった。

さらに、総合地球環境学研究所との連携体制も固めた。総合地球環境学研究所の阿部健一教授とは、旧知の間柄であるが、2005年の愛・地球博（愛知万博）の機に、国立民族学博物館地域研究センターに所属していた阿部教授を中心に、いくつかの国際シンポジウムが本学で開催された。国際シンポジウム「多様性の未来」（主催ユネスコ・国立民族学博物館、2005年4月14、15日）、および、愛・地球会議4月テーマフォーラム「文化・生物の多様性と国際レベルの共通認識づくり」（主催2005年国際博覧会協会・博覧会国際事務局、後援ユネスコ・国立民族学博物館、2005年4月16日）、国際シンポジウム「持続的発展とその媒介者たち」（主催フランス政府、2005年9月19、20日）である。「生物と文化の多様性」等についての国際シンポジウムを、すでに2005年に実施しているものであり、そうした実績も「先住民族サミット in あいち」開催の布石となったわけである。総合地球環境学研究所を含む他機関との連携体制は以下のとおりである。

- ・総合地球環境学研究所：京都にある地球環境学研究者が多数所属する国立の研究所。阿部健一教授（森林生態学）を中心に、経費の一部を負担し、フォーラム等の運営で連携。
- ・（財）森林文化協会：須藤久士氏（常務理事）の協力を得て、マウコピリカ音楽祭の交流行事等で連携。経費の一部を負担。
- ・京都大学東南アジア研究所：山田勇氏（名誉教授）、清水展教授（所長）の協力を得て、運営、理論構築などで連携。
- ・県立芸術大学：石井晴夫准教授、宮崎喜一非常勤講師を中心に、民族芸術展示、ワークショップ等で連携。
- ・椋山人間学研究センター：渡邊毅教授（研究主任）の協力を得て、フォーラム運営などで連携。
- ・南山大学人類学研究所：後藤明教授（所長）の協力を得て、フォーラム運営などで連携。
- ・グループ「シサムをめざして」：本多正也氏らの協力を得て、フォーラム、文化交流イベント等で連携。
- ・野外民族博物館リトルワールド：大貫良夫館長（東京大学名誉教授は、元東大アンデス調査団団長）の協力を得て、リトルワールドのアイヌのチセ（家）でカムイノミ儀礼等を行い、音楽交流祭も行う。
- ・中部人類学談話会：中部地区の自然人類学、文化人類学の研究者で構成される地域学会（稲村が会長を務める）。フォーラム運営などで連携。
- ・モリコロパーク公園マネジメント会議：万博の理念を継承し、記念公園での活動を運営・実践する協議会組織で、愛知県、NPO 団体、企業、大学などによって構成（稲村が会長を務める）。地球市民交流センターでのイベント開催で連携。

「先住民族サミット」アイヌモシリ2008の素晴らしさは、アイヌの皆さんが披露されたカムイノミ儀礼と音楽・踊りによる先住民族の交流であった。そうした部分はぜひ2010年のサミットにも受け継ぎたかった。そこで、アイヌアートプロジェクトの結城幸司と福本昌二さんに、中部人類学談話会例会発表、リトルワールドでの公演、朝日カルチャーセンター講座などの機会に何度か愛知県に来ていただき、具体的な音楽祭の企画を練っていった。

さらに、日丸美彦さんの紹介で、宮崎喜一先生（愛知県立芸術大学非常勤講師や自然学校運営）を通じて、「13人のグランド・マザー」の招聘を企画していた広田奈津子さんと加藤高宏さんと知り合うことができ、相互に連携をとることになった。広田さんには、フォーラムの共同コーディネーターをお願いした。さらに、広田さんのネットワークを通じて、アース・デイの名古屋の実行委員長であった唐木志穂さん、彼女のアドバ

イザー・サポーターの肥田浩さんらとも連携することになった。肥田さんには、結城幸司さんとともに、先住民族サミットのマウコピリカ音楽祭の運営を仕切っていただくことになった。

また広田さんの紹介で、東ティモールの歌手エゴ・レモスさんを招聘することになった。エゴ・レモスさんの演奏には、東ティモールで活動されてきたシンガー・ソングライターの小向定に友情出演していただいた。さらに結城幸司さんの紹介で、アラスカのトリンギットのストーリー・テラーのボブ・サムさんの招聘も実現した。シンポジウムに参加が決まっていたエディさんとケントさんに加え、ニュージーランドのマオリで国内在住のエボニー・ジュリさんも参加し、マオリのハカ（戦闘舞踊）などの民族舞踊や歌を披露していただくことになった。

国内からも、大阪で活躍するアイヌ「ミナミナの会」のみなさん、さらに東京から「ヤイレンカ」のみなさんの参加が決まり、アイヌアートプロジェクトと合わせて、北海道、東京、大阪のアイヌの音楽が愛知に集合することになった。結城さんの紹介で、オーストラリアアボリジニーの巨匠から伝統楽器を学んだマーキージョモラこと岩田昌大さんも参加することになった。アイヌアートプロジェクトには、船橋一華さんがパーカッションとして加わった。

地元名古屋からは、カナル・キソルさんの仲介で、名古屋在住のネパール人で構成する音楽・踊りのグループを編成していただいた。また、私が指導する大学院生のソロンガさん（中国内モンゴル出身）の紹介で、馬頭琴奏者・ホーミー歌手のソダラフさんにも参加していただくことになった。さらに、私の大学院指導生で沖縄の文化などを研究している唐木健仁くんの紹介で、浜崎重則ご夫妻に三線演奏と沖縄の歌を披露していただくことになった。浜崎重則さんのご紹介で「海風メンバー」によるエイサーも披露していただくことになった。

日本の里を代表して、深川和美さんとそのグループに参加していただいた。深川和美さんは、2009年4月に朝日新聞社が愛知県立大学で開催した「日本の里フェスタ」で童謡を披露された。その澄んだ歌声から発する里への思いは感動的だった。世界の先住民族のみなさんや一般参加のみなさんに、是非、日本の「心」の響きも汲み取っていただきたいとの願いから、深川さんに参加をお願いした。

こうして、マウコピリカ音楽祭も大規模な「せかい先住民族+日本の里」交流祭となった。さらに、宮崎喜一先生にネイティブ・アートを企画・実施していただくことになった。ネイティブ・アートのフラッグが会場を埋め尽くすことになり、音楽だけでなく、アートとのコラボも成り立った。その実施のため、以下の多くのボランティアに活躍していただいた。青柳博樹さん（アート&ライフ自然学校）、名川敬子さん（アトリエフラワーチャイルド）、石井晴男先生（愛知県立芸術大学美術学部准教授）、余語エリコさん（イラストレーター）、飯田友子さん（イラストレーター）、山田彩香さん（愛知県立芸術大学美術学部学生、以下同様）、甚剛さん、藤本あかりさん、服部恭子さん、阪本雅さん、浅田雅人さん、野崎貴寛さん、中川卓也さん。

先に紹介してアース・デイの唐木志穂さんたちは、栄の真ん中で、石川仁さんをリーダーとしてアンデスの葦船をみんなで作るという奇想天外なイベントを計画していた。私はアンデスのチチカカ湖の「浮き島」を何度か訪問し、現地での「アシ舟」制作を見たり乗ったりしたことがあるが、それだけに、日本人の手で大きな葦船を作って海を航海するなどという企画が本当にできるのか疑問に思っていた。しかし、全長12メートルのアシ舟は、栄のど真ん中で着々と進められていった。「先住民族サミット」の期間中、ボブ・サムさんら先住民族やアイヌの方々もそのイベントに参加した。COP10の終了後には、見事に完成した葦船が、名古屋港から伊勢神宮に向かって出帆した。

肥田さんに頼まれ、2010年春のアース・デイに呼ばれて久屋大通り広場で講演をした。結城さんたちのアイヌアートプロジェクトの演奏も行われた。そこで、英字紙「キョウト・ジャーナル」の編集をしている、京都産業大学の岡崎享恭・ジェニファーさんご夫妻のインタビューを受けて、知り合いになった。彼らは以前から結城さんの知り合いであった。そのとき、岡崎さんから「先住民族サミット」でのボランティア参加の申し

出があった。結局、「先住民族サミット」での通訳を全面的にお願いすることになった。それだけでなく、アブストラクト集の英訳も大車輪でやっていただいた。翻訳作業は、岡崎さんとジェニファーさんのほかに、小林舞さん（京都大学大学院生）、小出俣子先生（名古屋大学等講師）、本学の渡会環先生、谷口智子先生、小座野八光先生、カナル・キソル先生、王曉葵先生、天野圭子先生、石井祥子先生にやっていただいた。また、英文チェックをエドガー・ポープ先生にやっていただいた。

多くの大学院生（および修了生）たちが縁の下の力持ちのボランティアとして活躍してくれた。会場設営・受付等の加藤小夜子さん、ソロンガさん、金秋延さん、チョロモンチチカさん、チンサさん、スイジェさん、方学善くん、サラナさん、王ギビンさん、ビデオやカメラの福原弘識くん、小野田拓未くん、参加者送迎の竹内源くん、竹内愛さんらである。また、経理補助作業、連絡係り、ネイティブ・アートの手伝い等で多くの学部学生のみなさんもボランティアとして協力してくれた。加嶋朋子さん、高木雪衣さん、田中絵梨奈さん、丹羽悦子さん、伊藤亜美さん、ラジャイ麗良さん、伊藤亜衣さん、藤沢健人くん、宮道有也くん、長坂倫吏さん、小嵯湧登くんらである。また、国外招聘者の送迎も欠かせない仕事であったが、先にあげた院生の他、小座野八光先生、天野圭子先生、キソル・チャンドラ・カナル先生、ジェニファーさん、アラン・ハイメくん、稲村薫子さんらにお願いした。

会計や参加者との連絡等も大変な作業だったが、事務の林千枝子さん、臨時事務の日丸真里佳さんにやっていただき、谷口智子さんの応援を得た。会計事務の河田里恵さんには大変お世話になっただけでなく、日曜日にリトルワールド往復のバスの運転までしていただいた。会計監査は地域連携センター長の加藤史朗先生にお願いした。ホームページや情報機器に関して、本学情報科学部事務の林英文さんが協力してくれた。また、愛知県立芸術大学の石井晴雄先生の指揮の下で、美術学部学生の服部恭子さん、阪本雅さん、藤本あかりさんがホームページへの掲載を担当してくれた。卒論でアイヌ文化をテーマを扱った愛知教育大学学生の矢倉広菜さんも、音楽祭の進行などで活躍してくれた。また、受付や工芸品販売などのボランティアとして、「シサムをめざして」のメンバーから、スピーカーの本多正也氏以外に、札幌の佐々木慶子さん、函館の飯田明氏、東京の加藤登氏、津田仙好氏、井川猛氏が参加した。

実行組織は以下の通りである。

#### <実施委員会>

委員長 佐々木雄太（愛知県立大学学長）

委員 稲村哲也、杉山三郎、加藤史朗、山田勇、小野有五、萱野志朗、結城幸司、中根勉、阿部健一

#### <実行委員会>

（代表・世界先住民族サミット統括）稲村哲也（愛知県立大学教授）

（共同代表・古代文明フォーラム統括）杉山三郎（愛知県立大学特任教授）

（共同代表・先住民族サミット企画）萱野志朗（WIN-AINU 代表）

（共同代表・先住民族サミット企画）小野有五（北海道大学教授、WIN-AINU 役員）

（共同代表・総合企画・広報）中根勉（朝日新聞社統括センター長）

（共同代表・学術企画）阿部健一（総合地球環境学研究所教授）

（会計）谷口智子（愛知県立大学准教授）

（監査）加藤史朗（愛知県立大学教授）

（総合企画・広報）日丸美彦（朝日新聞社広告委員）

（文化企画）須藤久士（森林文化協会常務理事）

(アピール調整) 秋辺日出男 (WIN-AINU 事務局長)  
(アピール調整) 島崎直美 (WIN-AINU 役員)  
(学術企画) 山田勇 (京都大学名誉教授、熱帯生態学会前会長)  
(学術企画) 清水展 (京都大学教授、東南アジア研究所所長)  
(学術企画) 渡邊毅 (相山女学園大学教授、相山人間学研究センター主任研究員)  
(学術企画) 渡邊欣雄 (中部大学教授、日本文化人類学会会長)  
(国際関係) 後藤明 (南山大学教授、人類学研究所所長)  
(国際関係) エドガー・ポープ (愛知県立大学教授)  
(国際関係) 小座野八光 (愛知県立大学准教授)  
(国際関係) カナル・キソル (愛知県立大学非常勤講師)  
(国際関係) 岡崎享恭 (京都産業大学講師)  
(国際関係) 広田奈津子 (名古屋市生物多様性アドバイザー)  
(文化交流) 結城幸司 (WIN-AINU 副代表)  
(文化交流) 石井晴雄 (愛知県立芸術大学准教授)  
(文化交流) 宮崎喜一 (愛知県立芸術大学非常勤講師)  
(文化交流) 本多正也 (グループ「シサムをめざして」調整委員)  
(文化交流) 亀井哲也 (野外民族博物館リトルワールド主任研究員)  
(文化交流) 唐木健仁 (愛知県立大学大学院生)  
(庶務) 渡会環 (愛知県立大学講師)  
(庶務) 王曉葵 (愛知県立大学非常勤講師)  
(庶務) 林千枝子 (愛知県立大学多文化共生研究所担当事務)  
(庶務) 日丸真里佳 (愛知県立大学COP10 担当事務)  
(庶務) 嘉幡茂 (愛知県立大学客員共同研究員)  
(庶務) 天野圭子 (愛知県立大学非常勤講師)  
(庶務) ソロンガ (愛知県立大学大学院生)  
(庶務) 金秋延 (愛知県立大学大学院生)

## ■ 「先住民族サミット」を振り返って

COP10 を機に愛知県立大学ならではの企画をと考え、「せかい SATO フェスタ」を企画・実施したが、「先住民族サミット in あいち」だけでも一大イベントとなり、地方の公立大学の能力限界をはるかに超える規模になった。それは、WIN-AINU の方々の実績とネットワークと熱意、朝日新聞社の人材と組織力、総合地球環境学研究所等の他機関の協力の賜物であった。連携・共同の力を改めて実感した。

「先住民族サミット in あいち」の実施によって、「生物多様性」と「文化多様性」のかかわりの重要性、具体的には、先住民族に代表される人々の「生物多様性に関わる知」「環境との共生の価値観」「環境の持続的利用の技術」などを再評価し、地球市民がそれを学び、尊重し、地球の未来の方向性と生き方を考えることの大切さを再確認できた。また、それをメディアの力によって社会に発信できたことは大きな成果であった。COP10 本会議への直接的関与という点からは限界があったが、こうした活動を継続することで、より大きな歴史的意義が生まれることだろう。

自然や大地を祖先や家族と考える価値観、すなわち、環境を外部の対象ではなく内在的なものとして捉え

る、先住民族の方々の「自然な」自然観・価値観の説得力は大きかった。伝統音楽・芸能はそうした価値観を完成に訴えかけるエネルギーをもっていた。

今回の「先住民族サミット」では、研究者と先住民族がまったく同じ土俵で議論・交流できたことも大きな収穫であった。もとより先住民族同士の連携・交流は重要であり、それによって、権利の回復に向けての連帯と自信・自覚、また多様な文化の重要性の相互確認が可能となるだろう。しかし一方で、今日の地球環境の危機的状況の中で、先住民族と研究者、および広く地球市民が連携・交流し、相互に理解し、発信することも重要である。連携による相乗効果は想定以上のもので、その大きな可能性が確認できたと言えるだろう。そうした収穫は、WIN-AINUのみなさんの寛容さと熱意に負うところが大きい。

通常のフォーラムと異なり、「先住民族サミット」はより多くの人に参加すること自体に重要な意味があった。そのため、フォーラム参加者と音楽祭参加者の数がどンドン膨らんだ。直前まで（いや終わった後でも）、いったい合計で何人が参加したのか把握できなかったほどである。直前に決まったり、飛び入りの参加もあった。大学の経理手続き等の枠を大きくはみ出して、各方面にご迷惑をおかけした。フォーラム参加者の発表時間も短く、聴衆者にとっても、もっとじっくりと話を聞きたいという不満が残ったかも知れない。こうしたイベントの難しいジレンマである。

2008年の「先住民族サミット」の事務局長を務めた結城さんが、「終わったあと一年間、引きこもっていた」と言っていた。私の場合も、引きこもるわけにはいかないとしても、イベントのあとの脱力感は避けられなかった。一週間にわたっての徹夜・寝不足状態もさることながら、脱力感の要因の一つには「言っていることとやっていることのギャップ」があるかも知れない。なにしろ、私自身、持続的農業を実践しているアンデスの民や、草原を劣化させない季節移動をするモンゴル遊牧民と過ごした後、日本に帰ると、車に乗って排気ガスを撒き、毎朝大量のゴミを出す「環境汚染」の実践者として生活しているのだから。「都市の先住民族」について発表したディネ（ナバホ）・インディアンのクリシーさんのように、「先住民族サミット in あいち」に参加した先住民族やアイヌのみなさんの多くにとっても、状況はある程度共通しているだろう。

しかしそうした状況を率直に認めるとしても、研究者や先住民族の代表者が、「伝統知」の「媒介者」として連携し、議論し、交流し、発信することの意味は、決して小さくないと思う。祖先から受け継いだ価値感や知恵から学ぶことで、社会を変えられるからである。身近な例をあげてみよう。ヒマラヤの研究仲間で友人である環境社会学者の古川彰氏らが連携している矢作川漁業協同組合は、「環境漁協宣言」をし、川の護岸工事にドイツの「自然工法」を取り入れた。因果関係は必ずしも証明されないが、川にアユが遡上しているという。古代文明が大河流域で興ったように、川は人間にとって親しい存在であったはずであるが、災害防止の名のもとに、私たちは身近であったはずの川をコンクリートで固め続け、生活を川から切り離してしまった。その誤りに気づき、考え方を変えれば、私たちの生活や社会はまだまだ変えられるのである。

アンデスの先住民族は、ジャガイモの多様な品種を生み出して、それらを一緒に栽培している。寒さに強いもの、病虫害に強いものなど多様である。毒のあるジャガイモもあり、毒抜き冷凍乾燥加工法を考え出した。毒のあるジャガイモには虫がつかない。野生本来の防御能力を保持しているのである。現代の農業では、短期の生産性を重視するため、画一的な品種を大量に生産する。家畜も同様である。その結果、鳥インフル、豚インフルといった感染症が世界に蔓延する。先住民族の知、古来の知、在来の知から学ぶことは多く、私たちが疑問に思わず突き進んできた道程の誤りに気づかされるのである。先住民族の実践者と研究者の連携の意味がそこにあると思う。

最後に、実行委員やボランティアとして参加いただいたみなさんに感謝の意を表したい。あまりにも多くの方々の協力を得たため、お名前が漏れてしまった方もあると思う。その方々を含め、心よりお礼を申し上げたい。